

第 11 回 物学研究会レポート

1999 年 2 月 22 日、第 11 回物学研究会はノンフィクション作家の山根一眞氏をお迎えしました。テーマは「アタマ壊して物作り」。既成概念にとらわれることのない自然や人間に対する暖かな視点を基調に、ノンフィクション作家として活躍されながら、NHK のキャスター、連作『メタルカラーの時代』の著作と、多忙を極めておられる山根さんです。その行動と実践からのみ得ることのできる物作りへの提言のには、まさにその現場にいるデザイナーにとって、数々のヒントが潜んでいるにちがいありません。以下はそのサマリーです。

山根一眞（ノンフィクション作家） 「アタマ壊して物作り」

1、日本の情報機器、最近の傾向

イントロダクション

今回、黒川雅之さんから物学研究会での講演依頼をいただき、どんな話をしようかといろいろ考えました。私は、先ほどご紹介いただいた『メタルカラーの時代』を 3 巻出版しております。そこでは主に日本のインフラストラクチャー、瀬戸大橋のような巨大建設プロジェクトや情報ネットワーク、宇宙プロジェクトなどを支える技術者をインタビューし、日本の物作りの知恵や技術力を紹介しています。この本はお蔭様で、大反響を呼びトータルで 30 万部以上発行されました。最初はこんなことをプロジェクターとパソコン画面を結んでプレゼンテーションしようかとも考えたのですが、その手のセミナーは皆さんも度々参加されているでしょうし、眠くなると思いますので、今日は私が収集している実際の「物」を見ていただきながら、デザインや物作りのヒントを感じていただければと思います。

取材現場は不自由ばかり

その 1、いまましい電池切れ・・・ソニーハンディカム

私は様々な環境で取材やインタビューをしますが、なかなか理想の録音機がないので、仕事場にはすでに 20 台のテープレコーダーが転がっています。そのうち 18 台くらいがソニー製です。こんなに増えたのは、どれにも満足できないから次々と新しいものを買ってしまうからです。現在のテープレコーダーは会議などでマイクを机に置いて録音することを前提にデザインされている。けれども、今の

私がそうですが（講演録をとるために、山根さんが持つソニー製のマイクにソニー製のテープレコーダーのマイクをセロテープで貼り付けている）、動き回る人の話を録音する場合には困ってしまう。例えば、工場や研究所での取材のときは、相手にマイクを向けて追いかけることは不可能ですし、失礼です。そこで相手のポケットに1台、自分用に1台と2台用意します。ところがこれも2時間でテープはお終い。

最近では、ソニーのデジタルハンディカムを相手に向けて、ビデオで撮っています。これはほとんど音撮りのためで、マイクよりはビデオカメラの方が違和感がないだろうということです。しかしビデオカメラは消費電力が大きいので、たちまち電池切れです。よって、地方取材に出るときのかばんの中身は充電電池だらけです。

その 2、さりげなく撮影したい・・・富士写真フィルム「シンプル Hi-8」

私はソニー製品が好きでたくさんもっているのですが、もっと使う人のことを考えてほしい。私は気に入ったものであれば何年も使うし、同じモデルを2、3台でも買います。ちょっと古い機械なのですが、非常に気に入っているビデオカメラがこのフジの「シンプル Hi-8」です。市場ではあまり売れなかったようですが、首から下げると本体がちょうど胸のところにきて、上の蓋を開けると液晶画面が覗ける。つまり録画スタートスイッチを押せば両手放しでも撮れます。一見すると首からぶら下げているだけというさりげない振る舞いで撮影できるので、許可ナシの撮影のときなどに重宝します。実際この「Hi-8」で多くの映像を記録を得ました。ところが8ミリビデオの時代はアツという間に終わってしまい、デジタルビデオの時代が到来した。私は気に入ったので2台も買ったのに、無念の思いです。

その 3、なぜ縦で見ることのできるカメラやテレビがないのか！

最近取材でノートを使う代わりにビデオカメラを多用してます。8ミリビデオで2千本、デジタルでも数百本は撮ったでしょう。なにを撮るかという文字情報です。例えば、博物館や美術館のパネルなどをスキャンするように撮ることで、後に1コマづつメモとして読むことができます。ノンフィクションを書くには情景や形態の表現がとても大切なので、映像作品というより記録という感じで撮影します。ところがビデオは横長画面でしか撮れないので、大きな塔や建物は仕方なく縦位置で撮り、テレビを転がし縦に置いて見たりしています。縦位置のビデオやテレビがあってもよいのではないかと提案したい。

その 4、スチールカメラとビデオカメラを一体化せよ！

記録に関していえば、いくらデジタルビデオカメラが進化したといってもスチール写真も欲しい。出版物の利用などを考えると、やはりスチールですから。そうなると首からビデオカメラとスチールカメラをぶら下げることになります。ところが人間の手は2つしかないのですから、ビデオとカメラを同時に撮ることはできません。情報機器のサイズがこれだけコンパクトになったのですから、ビデオカメラにAPS フィルムのコンパクトカメラを一体化させて、ムービーも写真も同時に撮れるハイブリッドカメラがなぜできないのか不思議に思います。

最近、ハワイのマウナケア山頂にできた「すばる」という世界最大の反射望遠鏡の全体像を俯瞰で撮るために、ヘリコプターによる空撮をしました。元レスキュー隊員だったというとても勇敢なパイロ

ットの操縦でした。お陰でヘリコプターのドアを外し、体をベルトで固定して半分身を乗り出して、なかなかいい撮影ができました。けれどもこんな過酷な状態でビデオカメラとスチールカメラを使い分けることは不可能です。そこでビデオカメラとスチールカメラを一体化させるオリジナル部品を作り撮影に臨みました。

その5、ビデオカメラを撮ることは恥ずかしい行為？である

・・・シャープ液晶ビューカム以後

さて、大好きなビデオカメラはどこのメーカーがいいかとなると、やはりデザインで決めますね。シャープは以前、「液晶ビューカム」で一世を風靡しました。このデザインは確かに使い手にはやさしい形だとは思いますが、何かちょっと変ですね。この液晶ビューカムの影響なのか、その後のデジタルビデオカメラはみんな液晶を立てたまま撮影するスタイルが流行しました。けれども、ちょっと考えてみてください。あれは、自分が何を撮っているのかを周りの人たちも見ているわけで、ちょっと気持ち悪いものがあります。これは、自分が一生懸命書いている日記を周りの人がずーっと見ているという状況と近いものがあります。無防備といいますか、パンツ一枚で撮影しているような気恥ずかしさがあります。

その6、ユーザーの「慣れ」を裏切るな・・・ソニーPC シリーズ

しばらくするとソニーのPCシリーズというデジタルビデオカメラが出てきて、僕は「PC-7」を体の一部になるほど使い込みました。それから「PC-10」、最近、世界一小さい「PC-1」を買いました。ところが、このPC-1は、PC-7、PC-10を使い込んでいたユーザーにとって気持ちの良くないことがある。レンズのズーム。レバーのWとTの動かす方向はが逆になったからです。無意識に操作するとWとTを逆にしてしまう。しかも、小型化のあまり電池が10分くらいしか持たない。スタミナハンディカムなんて宣伝していますが、あれは巨大電池をつけるだけの話で、電池部分がこぶじいさいんのように飛び出すんですね。それで私は、電池がすぐ切れるのを「スタミナ切れ、ハンディカム」と呼んでいます。

その7、商品が短命すぎる！進化する道具を。

こう考えてくると、確かに私たちユーザーも貪欲で満足することを知らないことを反省すべきだと思う。作り手はそういうユーザーに合わせて開発を続けてしまうんでしょうね。それにしても製品の回転が速すぎます。環境や資源への配慮が必要な時代です。新製品を次々発表し売り上げを伸ばすことよりも、手堅くいつまでも売り続けることのできる製品をじっくり作っていくことが重要でしょう。企業間の競争が大変なことも充分理解しますが、買って1年もしないうちに新製品が出てしまったときのユーザーの怒りは大きい。私はワードプロセッサが出てすぐに、当時190万円の機械を5年間リースした。ところが半年も経たないうちに高機能で安価な新製品が出て、何年もそういう変化が続いた。ほとんど使わない何台ものマシンのために、長いことお金を払い続けてきました。キヤノンのGモードのミニファックスなど、数ヶ月使っただけでずっと物置。支払っただけは5年続いたんですから。私はマッキントッシュのパソコンを使っていますが、古いマシンでも世代交代のたびにマザーボードを取り替えるなどによって、常に最新マシンの変わっていきける あれはいいですね。

2、古の美しい道具、愛でる情報機器

ライカ「M 3」とデュボンのライター

さて、黒川さんや皆さんのようなデザイナーの専門分野になりますが、最近、存在するだけで美しい、持っていて愛でたい、という道具が、特に情報機器の分野には少ないように感じます。ライカの「M3」は、人類が作った最も美しい機械です。これ、50才の誕生日にスタッフが買ってくれ、51歳の誕生日に妻が35ミリのズマリットレンズをプレゼントしてくれました。とにかくいつもそばにおいて愛でたい機械であります。愛でたい機械というのは、使う方も大切にします。絶対に壊さないし、なくさない。不思議ですね。なくさない物といえばデュボンのライター、これも絶対なくさない。このパシュンと蓋をあけるときの音と感触を楽しむために、煙草を吸っていると思うほどです。100円ライターなどすぐなくす。先日事務所の大掃除をしたら数十個以上でてきましたよ。

情報機器で美しく愛でたくなるようなものが作り得るのかという問題ですが、あり得るんですね。残念ながら今はない、昔はあったんです。

国民型ラジオ（ラジオもった山根さんの写真入る）

これは第二次世界大戦終戦の玉音放送を聞いたときの「国民型並四ラジオ」です。松下製。見つけたときには大分壊れていましたが、自分で修理してついに鳴るようになりました。「26」など、「6D6」や「6C6」といったポピュラーなST管より一世代古いタマを使っています。ボディは木製でダイヤル部分の樹脂の使い方がとても美しい。もちろん現在の物と比べると稚拙だし、回路も単純です。けれども飾っておくだけでもなにか暖かな気持ちになります。それに比べ、最近のラジカセや電話のデザインはこれだけなんでもできる時代にあって、どうしてまあ全部同じなんのでしょうか？ラジカセなどどれをとっても丸っこくてプラスチックで、まるで全部がOEMなのではないかと疑いたくなるほど、日本のメーカーには「美しさ」の分っているデザイナーはいないんでしょう。テレビにしてもみんな真っ黒。シンプルなデザインの木製ボディなどもっと多様なテレビがあったていいじゃありませんか。iMacが半透明のブルーのボディというだけで、秋葉原でパソコンの売り上げトップになった。

携帯蓄音機（写真入る）

ではどんな物が美しく、長い間持ち続けることができるのか……。この携帯用のSPレコード蓄音機は元祖ウォークマンで、僕が大変気に入っているものの一つです。いつ頃の製造なのかははっきりしないのですが、たぶん50年前かな。ウォークマンが登場する30年も昔に、こんな道具を持って海に遊びに行ったおしゃれな人間がいたのでしょうか。これは要は携帯レコードプレイヤーで、遊び心に満ちています。まず蓋を開ける、するとラッパとハンドルが入ってます。ラッパを本体に取り付け、ゼンマイを巻き、レコードを載せる3本の支持アームを広げます。聞いてみましょう。これは「支那の夜」ですが、電気を使わずにこれだけの音を聞くことができる。これ、私たちが音楽をどこでも自由に聴けるようになった第二世代の道具ですが、50年過ぎた今でも楽しめる……。素晴らしいことだと思います。

エジソン社の蓄音機（写真はいる）

第一世代は、エジソンの蝋管式蓄音機です。この 100 年以上経っているだろう美しい木箱の中に全てが収められていて、ラップを付けてゼンマイを巻いて音楽を楽しみます。銘盤や文字などの装飾も美しい。音質や機能は現在の物とは比べる由もありません。しかし、人類が初めて音を記録し、自由に再生して聞くことのできた原点がここにあると考えると、私たちは機能の進化は手にしたけれど、なにか大切なものを忘れてきてしまったように感じます。

この蓄音機には面白いソフトがあるんです。外国語学習用の蝋管です。うちの娘も高価な英語教材を買ったものの机の後ろに置いたままでした。実際にこうした教材で語学がマスターできるはずがないのですが、人間はその幻想を持ち続けていたわけです。変わる事のない情報機器と人間の関係性という接点を教えられているように思います。

木製ラジオ（写真入る）

これは 60～70 年前の真空管 1 本だけの初期型ラジオです。音はヘッドホンで聞きます。高価であるにも関わらず、ラジオならではの美しさや雰囲気惹かれて買ってしまいました。当時これを作ったのは機械屋さんだと思うのです。機械屋さんが、美しさに気を使いながらデザイン力を備えていた「技」を見るようでとても楽しいのです。

3、今後の情報機器へのヒント

その 1、情報機器にプリント機能を搭載する

さて、話を情報機器に戻しましょう。私たちが現在使っているコンピュータやデジタルカメラ、携帯電話は「進化」が速すぎて大事なことを忘れていきます。デジタルカメラでいえば、28 万画素、35 万画素、80 万画素、150 万画素、230 万画素と画質はどんどん進化してきた。私はこれらを全部買って使ってきましたが、撮った写真はプリントがモニターでしか十分楽しめない。A 4 サイズの「紙」のような折り畳みのできるディスプレイさえあればいいのに、そういうアウトプットの開発に全力を尽くしてほしい。撮影済みのビデオの整理はとても面倒くさい。ビデオデッキに小さな簡単なプリンターが付いていて、録画すると自動的に何年何月何日、何チャンネル程度の情報がのり付きラベルで出てくるだけでどれだけ助かるでしょうか。

その 2、モバイルの本当の意味を問うべきだ

現在はモバイルの時代と言われています。しかしジャーナリストはずっと昔からモバイルを実践していた。従軍記者は戦場からでも原稿を書いて送らなければならなかったのです。

『史上最大の作戦』というノルマンディ上陸作戦を撮った映画の中で、新聞記者がニュース原稿を送るためにスコットランドの将校に無線機を貸してくれと頼むが、それどころじゃないと断られるシーンがあります。仕方なく記者は伝書鳩で原稿を飛ばすのですが、鳩は全然違う方向に飛んでいってしまう。現在ならば、メールで送った原稿が文字化けしたのと同じです。また『慕情』という映画では、ウィリアム・ホールデン扮する新聞記者は朝鮮戦争の戦場で、タイプライターで原稿を書いていると

きに爆撃を受けて死ぬわけです。僕は最近従軍記者用のタイプライターをやっと手に入れたんですが、これは元祖モバイルギアみたいなもので、キーボード部分がパカンと上がって大きさが半分になるように設計されている。戦場記者たちはこのようなモバイルタイプライターを持ち、命がけで原稿をタイプし、伝書鳩によってニュースを送り続けていたんです。タイプライターの効用は、1枚の用紙にたくさんの文字を書き込むことができる点にある。手書きだと5倍ほどの用紙が必要なので、伝書鳩使うことを考えると、用紙の枚数を減らす目的もあったのでしょう。

こういうジャーナリストの歴史を振り返ってみますと、モバイルや情報機器に最も苦勞し、かつ、求め、ノウハウを蓄積しているのはジャーナリストであると思うのです。

先日、カザフスタンのバイコヌール宇宙基地へ行ってきました。国際宇宙ステーション第一回目の部品の打ち上げの取材です。バイコヌールには、日本の主要新聞社や通信社の記者が来ていて、従来の高感度銀塩フィルムで撮影していました。打ち上げの様子はロケット台から7キロメートルも離れたところでしか撮影できないので、1200ミリ級の超望遠でしか撮れなかったからです。カメラマンたちは撮影後直ちに現像し、フィルムスキャナーでノートパソコンに画像を取り込み、画質を調整し電子メールで送信するわけです。ただ、2メガ、3メガという重いデータはインターネットではトラブルが起きるので、日本の各社のホストコンピュータに国際電話回線で直接つなぎ、データをいきなり送り込む。写真数点を送るのには大変な時間がかかりますが、DHLで発送することを考えると時間的、経済的効果は絶大です。とにかく一刻を争う仕事ですからみんな大変です。こういう事体に限ってうまくいかないということがあります。

バイコヌールでも某新聞のカメラマンが何度トライしてもエラーで送れないということがありました。私は自分の仕事を済ませてから、彼の様子を見ていました。そして彼のプライドを傷付けないようにギリギリのところでお手伝いしました。私は、常にPCMCIAカードをスロットにぶち込む小型の外付けハードディスクを持ち歩いています。容量は約4GB。これを他人のノートパソコンに入れるだけで私のシステムが立ちあがる。アップルのパワーブックであれば、他人のコンピュータでもその人のシステムをいじらないで私のパソコンになってしまうわけです。こういう備えをしておけばトラブルで慌てずにすむ。

それにしても、どうして現在の情報機器はこうまで不安定で、ユーザーに対する配慮がないのだろうかと思います。最近の情報機器の開発では「モバイル」はキーコンセプトです。ところが、よくコマースナルなどで、片手に端末、もう片方の手に携帯電話なんていう写真を見かけます。しかし両手がふさがっていてどうやって操作するんですか！私は仕方ないので、風呂場や台所で使う吸盤型フックを持ち歩いています。新幹線の窓にペタッとこのフックを貼り付け携帯電話はそちらにぶら下げ、片手をフリーにした上で、テーブルで端末を操作するのです。ユーザーである私がどうしてここまでしなければならぬのかと思います。これ以外にも接続のコネクターの複雑さ、コードやケーブルのバラバラさ、ACアダプターの大きさや重さ・・・本当にうんざりします。

その3、情報通信インフラの不整備を改善せよ

日本では、情報機器以上に問題なのが情報通信インフラの不整備です。未だにホテルでパソコンに電話回線がとれず、わざわざローゼットを開いて直付けすることがあります。だいたいベッド脇にしか電話がないのは早くやめてほしい。数年前、新宿のホテルで仕事をしていて、大怪我をしたことがあります。当時は電話回線が取れなかったので、バスルームの電話機を壁から外し裏面の端子とモデム

を直結させていたのです。電話はだいたい便器の近くにあるので、水タンクをテーブルの代わりにし、便器に逆座りすると、原稿書きにはとちょうどよいスタイルになります。私はこれを国際便所通信と呼んでいました。あるとき、壁の電話機がどうしてもはずれないので、力任せに上にずらしたところ、パカーンと飛んで大怪我をしたわけです。すぐにマネジャーを呼んで応急処置をしてもらいましたが、電子メールを送るために何針も縫ったという人間は私くらいでしょう。

なぜ、私がこれほど苦勞をしなければならないのか。それは、ジャーナリストは常に、どこからでも記事をすかさず送るのが「仕事」だからです。シンガポールの国際空港では、至る所にテーブルと電源、モデューラーがあり、市内通話は無料。市内通話さえできればインターネットに簡単に接続できますから、大変助かります。情報立国でやっていこうという意気込みが感じられます。

最後に、愛でる道具を作って欲しい

終わりに、ひとつの例を考えてみたいと思います。富士写真フィルムの「ファインピックス700」というデジタルカメラをご存知だと思います。メガピクセル時代の先駆的商品でした。私はライカの「デジルクス」というモデルを持っているのですが、これ、「ファインピックス700」のOEMです。ところがその質感、デザイン、全体の仕上げの雰囲気は全然違います。価格的には、フジが6万円くらい、ライカは10万円近い値段で売られていた。けれども、価格以上の価値を見出して、私のように高価なライカ版を買ってしまう人がいるわけです。中身は同じでも、細部のデザインを積み上げていくだけで、これだけの違いが出てしまうのです。

ソニーを好きなのは、ソニーのデザインがいいからです。シャープには頑張ってもらいたいですね。技術力はあるのに、デザインでソニーに完敗しているからです。負けているとわかっているのだから、どうして勝てるように手を打たないのでしょうか！

私たちは多分、効率とか能率を考えるばかりに、つまらない道具、機械、環境を作りすぎたのでしょう。今こういう時代ですから、もう少し温かくて美しいものをお金をかけないで作る道があるのではないかと思います。メタルカラー*の皆さんに期待したいのは、例えば、とても複雑な形をした道具を作る際に、金型に木で作った液状の粉体を流し込み、まるで木そのものであるような道具を製造できる技術の開発です。これならば、焼却のときにダイオキシンを発生することもないでしょうし、その温もりが心を和ませます。日本人にはきめこまかいシステムを作ったり、極限まで精度を高めていく力があります。そうやって、愛でることのできる、愛することのできる機械を生み出して欲しいと思います。

*メタルカラー（『メタルカラーの時代』から）

- 1、金属製の襟。2、日本の工業力を世界のトップに水準に引き上げた産業界の主役。
- 2、創造的技術開発者の総称。ホワイトカラーとブルーカラーという従来の就労者分類から零れ落ちていた集団に対して「金属の耀く襟をもつ者」として、1993年に命名された新しい概念。その人口、10万人と推定。

以上